

氏名	川島 優	
学位の種類	博士（美術）	
学位記番号	博美第19号	
学位授与年月日	平成30年3月23日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当者	
題目	学位論文題目	内的感情の弁証法的表徴化としての絵画表現 —「不安」のレフォルメー
	研究作品題目	《Radiant》、《Re-actor》（《TOXIC》、《ZETA》、《INSIDE》）
論文審査委員	主査教授 北田 克己 副査教授 岡田 眞治 副査准教授 高梨 光正 外部 東京藝術大学美術学部芸術学科 審査委員 教授 佐藤 道信	

1 学位論文の要旨

現代において絵を描くことは、現代に生きる自己を表現することである。現代は、身の周りの急激な環境変化や、テレビ、雑誌、ソーシャルネットワーキングサービスなど、視覚的な情報媒体やテクノロジーに溢れている。幼少期を緑豊かな田舎で過ごした経験から、そのような人工的で無機的な世界への違和感は、今もなお自身の心の奥底に潜んでいる。その違和感は、時代の変化や現代社会の不穏な雲行きと共に、将来に対する「不安」をより一層募らせていった。「不安」とは、「安心」の対義語であり、心に安らぎがないことを意味する。セーレン・キルケゴールによれば、人間は、神により創造された時から、罪の意識とともに不安を抱えていた。

また、現代社会を生きていくためには、自己の存在や現実を見つめ直すことが必要であり、それが筆者にとっては絵を描く行為そのものになっている。現代社会において自己の内面世界を視覚的に表現することは、目の前の事象や困難に惑わされることなく、自己の存在を模索するための手段であると考えている。

以上の研究動機を踏まえて、自己の存在位置を見出すべく、第1章では、19世紀後半の象徴主義について、主観的、装飾的、内面的といった筆者との類似点から、その先駆的作家であったギュスターヴ・モローと自作の関係性について考察した。その結果、モローの描く「内面」が神秘主義者としての「幻想」であり、非現実的なものを描いているのに対して、自身の描く「内面」は、「不安」という現実そのものに向いていることを理解した。

続いて第2章では、現実内に内在する「不安」が絵画表現にどのような影響を与えてきたのかという観点から、20世紀に、戦争の恐怖と絶望の時代を生き抜き、その経験を制作に展開した画家フランシス・ベーコンについて考察した。ベーコンの生き方は、いかにもニーチェ的であり、戦争という背景やイギリスが自由主義的な時代傾向にあったことが、より野性的で、直接的な絵画表現を可能としたように見える。また産業革命による複製技術の発展から、写真が象形的役割を新たに獲得した中で、ベーコンは絵画を写実としての役

割から、より直接的な現実へと還元し、それをデフォルメすることで独自のリアリズムを見出したことを確認した。それは、抽象表現主義や写実主義とは異なる新たな絵画の立ち位置だったと言える。この考察から、ベーコンの表現主義者としての意志が、筆者の絵画表現への意志と類似していることを明らかにした。さらに、絶対的価値の否定から自己の価値を形成するというニーチェの超人論的思想や、ニヒリズムの構造に着目し現代に生きる筆者の立ち位置から、自己の「不安」と対峙し、乗り越えることが絵画制作に結びついている可能性を指摘した。

第3章では、現代という視点から、筆者自身の「不安」について深く考察した。幼少期から成長していく過程での出来事から、その特性を考察し、これまでの創作を再認識することにより、独自の絵画表現となるレフォルメ (Ré-former) という新たな概念を定義するにいたった。「レフォルメ (Ré-former)」は、本来「改革、改善」を意味する語だが、ここでは「不安」となる対象を自己を通じて描く事で、生きようとする意志へと転換する行為として用いる。ここでは、「不安」を意味する対象を「不安の象徴」、自己を通じて転換された対象については「不安の表徴」と呼ぶこととした。この「不安の象徴」とは、物質的エネルギー、情報的エネルギー、少女と力という、3つの要素からなっている。「表徴」には、あらゆる対象を表徴化する作用があり、2次的、3次的といった連鎖的な変化の性質をもつ。つまり、レフォルメ (Ré-former) はエネルギーの連鎖ともいえるべき、無限に変化、成長する絵画表現なのである。以上の構造をふまえて、生命誕生の源であり、我々に光を照らしてくれる太陽のような強い意志を自身の手で作り上げるべく、《Re-actor》を制作した。

この《Re-actor》は、「不安」をレフォルメ (Ré-former) し、生きる「力」を表現することを目的とした。それは、物質的エネルギー、情報的エネルギー、少女と力といった、筆者の記憶から還元された「不安」の対象を絵画表現に用いることで、「不安」を自己の「力」へと転換する。また、現段階において無機的でテクノロジーな絵画表現は、人間が考えることによって前に進んでいくという、進化する「力」を表現している。つまり、生きる「力」を表現することは、自己と向き合い、自己の「不安」を知り、自己の「力」を形成することなのである。以上の考察を踏まえ、筆者にとって現代を生きることは、絵を描くことであると結論づけた。

2 学位論文審査の要旨

川島氏は「不安」を動機として、また主題として作品制作を行ってきた。本論では現代に生きる自身の存在意義を探るため、「不安」を描くことの意味や表現の可能性を論じることを目指した。

まず、ギュスターブ・モロー、フランシス・ベーコンの「不安」について、その主題と思想について比較研究し、筆者の「不安」を定位しようと試みている。

氏はモローが19世紀後半、産業革命を経てキリスト教など既存の価値感の消失に直面して精神的不安や絶望が煽られる中、非合理主義の立場を採り、理想や幻想、自らが打ち立てた神性に絶対的価値を求めたが、社会からは遊離した非現実的世界を描いたと分析している。また、ベーコンの「不安」が現代に通じることを認めつつも、その作品と思想は実存主義の発展との密接な関係があり、戦争の体験などの時代的違いも否めないとしている。

氏は彼らの「不安」が図像的役割をもった「象徴」であるとする。

それに比して氏の「不安」が幼少期の体験や生まれ育った緑豊かな環境を離れ都会で経験した違和感などに由来する個人的なものであると分析し、「不安の象徴」の対象として物質的エネルギー、情動的エネルギー、少女と「力」を挙げる。ロラン・バルトの表徴化の概念を援用しつつ、「不安の象徴」を破壊、再構築し、「象徴」が作り手の感情、意志によって新たな価値へと転換した存在を「表徴」とする。その転換作業を「レフォルメ」として独自に定義した。

かつ氏の創作においては「不安」の「レフォルメ」の連鎖によって作品が生成されるとする。「不安」は「レフォルメ」によって生きる力となり、変換された作品が新たな起点となって作品が生まれるとの主張は創作による負の内的感情の弁証法的な克服であることを示している。

氏はひたすらに内面を深く掘り下げ、創作に向かわせる内的実体が「不安」であるとした。それは個人的な「不安」であるとともに、現代の「閉塞感」や「疎外感」、特に若い世代に顕著なコミュニケーションへの不安や恐怖感を想起させ、それ自体が創作の動機であることを強く窺わせる。

「不安」を「レフォルメ」という転換行為を経て、現実の自己の生きる力として実現するとの氏の主張は独自であり、新しい創作行為の概念を提示するに至った。また、氏の行為そのものをニーチェ、ハイデガーなどの哲学に寄り添いながら反省した点も大いに評価する。

氏の論文は高い論理性に基づいて詳細に描き手の内面と創作の関連をリアリティをもって論じた労作であり、その結果として博士学位に相応しい内容と質を備えたと考える。

【作品】

《Radiant》、《Re-actor》（《TOXIC》、《ZETA》、《INSIDE》）展示は「動力炉」と銘打たれた。

《Radiant》は《仏涅槃図》（金剛峯寺（和歌山）蔵、1086年）に着想した作品である。

《Re-actor》は《大日如来座像》（運慶作、鎌倉）、《知・感・情》（黒田清輝、明治）に着想し、《TOXIC》、《ZETA》、《INSIDE》からなる三幅対（triptych）作品である。

《Radiant》は個人的な「不安」から、より普遍的な「死」や大切な存在に対する衆生の喪失感を「レフォルメ」によって過去のものとし、新たな自己価値の誕生を表している。

《Re-actor》では太陽を象徴する大日如来の力強い生命が描き出され、個人を超えた他者への救済の意識が入り込んでいることが窺われる。その表現は黒田が西洋に学び日本で築こうとした理念的絵画とリアリズムへの忠誠を示唆する。本作は三幅対という形式を採り、展示では作品に見られる視点の違いを利用して高低差をつけており、祭壇画を想起させる空間を表出した。

いずれの作品も鋭い描写力とモノクロームの限定された色彩で表現され、黒色を自製するなど技法材料研究の成果が高い水準で結実している。論文研究と歩みをともにして深く内面を見つめ、創作の意志として弛まず、揺るぎなく追求し積み重ねてきた姿勢を十分に窺わせるものであり、高く評価する。

【口頭発表】

論文要旨、作品について発表を行い、質疑応答ではレフォルメによって氏が不安から解き放たれ、不安そのものが止揚されるのかとの問いに対し、不安に向かい合うこと自体がレフォルメの持つ重要性であるとの意見が述べられた。態度としてのレフォルメであり、動機としての不安であることは氏にとって変わらないと理解する。

思索を重ねた論文に沿って的確な発表がなされたことを評価する。

以上のように、川島氏はこの論文及び作品において、博士の基準を満たすことを示した。

3 最終試験結果の要旨

最終試験において、川島氏の論文について綿密な論理を通じて、「不安のレフォルメ」という表現の可能性について論じたことを、審査委員は高く評価した。

作品については三年間の充実した実績を基盤として、審査作品はそれぞれに非常に高い内容と質を持ち、優秀であると判断した。

口頭発表では、論文要旨、作品解説を的確に行い、十分な説得力を示し優秀であった。この成績は、博士の学位を与えるに十分であった。